



蒲田のグランドキャバレー

廣瀬 達志

グランドキャバレーとは、戦後の昭和四〇年代の高度成長期に全盛期だった大型社交場で、一〇〇名以上の客を収容し、広い店内に豪華な応接用のソファークッションがいくつも並び、シャンデリアなど豪華な照明器具を配し、ミラー

ボールなどの演出もなされていました。正面の舞台では生バンドの演奏があり、舞台前のフロアではダンスができ、日に二、三回はショータイムがあり、ゲスト歌手やダンスレビュー、曲芸などが披露されました。各客席に接客の女性（社交さん／ホステス）が配置され飲食し会話し、ダンスの相手をするなどの接待をしました。いわゆる「風俗」というものではなく、健全な大人の社交場であり、いかがわしい施設ではありません。

さて、戦後闇市から工業で発展した蒲田にはこのグランドキャバレーが少なくとも四、五軒はあったとされています。しかし高度成長が終わる頃からこのグランドキャバレーは一軒ま

た一軒と廃業し、二〇一七年にはかろうじて蒲田駅西口の創業五三年の「レディタウン」を一軒残すだけとなりました。

蒲田モダン研究会では、いつこの昭和の遺産がなくなるか、とにかく存在している間に見ておこうということになり、二〇一七年六月、研究会は恩田一郎氏から世界のキャバレーの歴史の講義を受けた後、蒲田のグランドキャバレー「レディタウン」を訪れました。

訪問したレディタウンの客層も若い人は見当たらず、高度成長期から数十年経過し、当時は働き盛りだったはずの高齢の客が多く、接客のホステスさん（社交さんとも言った）の年齢層もかなり高齢でした。八〇歳を過ぎた着物姿のホステスさんもいて、グランドキャバレー自身が「昭和の遺産」となっていることを実感しました。なお、同年八月一日レディタウンは突然閉店となりました。私たちの訪問も閉店前の滑り込みだった訳です。

高度成長期の蒲田の情景

話は一気に昭和三〇〜四〇年代の蒲田周辺までさかのぼります。

戦後復興から高度成長期の経済を支えた京浜工業地帯の一角である大田区には、大小の工場が林立し最大ピークには九五〇〇工場があったといわれています。（ちなみに

今は三〇〇〇社。蒲田は金属機械工業、精密機械工業を得意とし、これらの工場で働くために数多くの青年男女が毎年地方から上京し蒲田にやってきました。

蒲田駅周辺の商業は、この青年労働者たちの消費によつて支えられています。

当時の蒲田を象徴するような話として、蒲田三大商業とというのがあります。蒲田駅周辺の商売で青年労働者に人気の商売は何だったかという設問です。

答えの一番目は「映画館」です。当時テレビはまだ完全に普及されていない時代でした。土曜日も平日と同じ様に働き、日曜日しか休めない彼らは、工場と宿舍の町・羽田や六郷や糺谷から都会である「蒲田」に繰り出します。娯楽の殿堂は映画でした。彼らを受け入れる蒲田には映画館がたくさんありました。現在は川崎に一元化したチネチッタの美須興業も蒲田と川崎を両拠点として映画館を展開していました。多摩川をはさんだ隣りの川崎も青年労働者を受け入れて発展した町で、蒲田と同じような状況でした。ここで、小林旭や石原裕次郎、浅丘ルリ子（少し後になると加山雄三）などの銀幕スター達を観て、映画館を後にします。

次（二番目）に寄るのは「洋品屋さん」です。地方から出てきた青年たちはあまり洋服を持っていません。そこで、給料が出ると映画スターたちが着ているようなカッコいい洋服を買うのでした。実際蒲田でVANショップを経営

した人に聞いた話では、当時流行ったステンカラーのレインコートが「飛ぶように売れて」四千着を売ったと言っていました。一店舗の販売数としてはすごい数だったと思います。

三番目に行くは「甘味処」です。ここで、「飲み屋」という答でないところが肝要で、中学や高校を出たばかりの未成年の青少年は地方であまり食べなかつた甘いものを、自分の給料を使って心置きなく注文したのでした。

以上の話は多少強調しましたが、事実この三大商業は大盛況で、何軒もの店舗が蒲田に展開されていました。そして、実は蒲田には青年達がまだ手の届かない第四番目の人気の商売があつたのです。

さて、日曜日も夕方になり、青年労働者がそろそろ宿舍に戻ろうとすると、道路の向こう側に見慣れた外車が停車します。「あつ、社長の車だ！」。中から自分の工場の社長が、普段の作業服とは違うオシャレな服で降りてきます。そして社長の向かう先は「ブランドキャバレー」です。社長は先日、金型の注文をこなし八百万円稼いだと言っていました。青年労働者は外車に乗って颯爽と現れて、ブランドキャバレーに意気揚々と入っていく社長を羨望と憧れの目で追います。そして「社長も職工の徒弟から始めて、裸一貫で腕を磨いて今の工場を起ち上げたと言っていた。社長は難しい金型だつてこなせるし。いつか自分も社長のように旋盤の腕を磨いて大金を稼ぎたい」と夢を膨らませ

ながら宿舎に戻って行くのでありました。

蒲田のグランドキャバレーの位置

きらびやかなグランドキャバレーで遊ぶというスタイルは、戦後の蒲田の成功者のステータスでもありました。

蒲田のグランドキャバレーは、決して都心のキャバレーや豪華で格上のナイトクラブとは違います。蒲田の町の特性としては、職住近接の世帯が多く、住宅だけが多いベツトタウンに近い世田谷区や杉並区とは違います。また、会社や大型の商業施設の比率の高い都心区とも違います。家も職場も学校も買い物もすべて大田区だけで済んでしまふ。一時期は家族も含めて大田区民六〇万人の三分の一が大田区内だけで生活しているという昼夜人口比のデータもありました。銀座などにはめったに行かない。ほとんど蒲田で用を足すという人が多かったのです。

そこで町工場の社長さんたちも近くて便利ということもあり、仕事が終わって遊ぶ場所は圧倒的に蒲田駅周辺の商業地域でした。蒲田駅東西の出口から続く駅前通りにはレストラン、食堂、大衆酒場、バー、スナックなどの飲食店が立ち並び、グランドキャバレーもその街並みの中にありました。

蒲田も東京の一角ではありますが、多くの蒲田周辺の住民にとって「東京」とは銀座や上野や新宿のような都心の街を指し、蒲田は東京であるにも関わらず、蒲田はあくま

で蒲田であり、そこはオシャレな東京とは違う下町で、働き衣食住を満たす生活の場でした。

戦後の町工場の発展の基盤は戦前に作られた

キャバレーからは少しズレますが、町工場の中堅の社長たちと話をしても「戦後の蒲田の工業の発展の話はよく聞くけど、戦前の話はあまり聞かない」との声をよく聞きます。今回、戦後のキャバレーの話に合わせて、参考までに簡単に紹介しておきます。

蒲田が工業の町として飛躍的に発展したのは実は戦後ではなく、戦前の昭和一〇年代から終戦の昭和二〇年までです。終戦をはさんで戦後初期は日本経済も足踏み状態が続き、やつと昭和二六年あたりからまた活況が復活しました。高度成長期には戦前からの潜在的な工業基盤を足掛かりに、蒲田は京浜工業地帯Ⅱ一大工業地域の一角として発展していきます。

さて、工業基盤を形成することができた戦前の飛躍的発展の理由として、

- ①京浜工業地帯は既に大正期（関東大震災以後）から工業基盤が成長しつつあったこと。
- ②日本が軍事態勢に入り政府予算が軍需にかたより、日本の官需や民需が極端に抑えられたこと。
- ③軍部は兵器開発・増産が必要となり工業基盤のある地域に大量の軍の生産注文が集中したこと。都心（中央）に近

い地域でもあったこと。

④東京への人口流入により工業発展期に地方からの労働力を大量に確保できたこと。
などが考えられます。

なお、上記の④に関連して、大田区の人口では、昭和五年に二四万五千人が五年後の昭和一〇年には三四万九千人、さらに五年後の昭和一五年には五三万二千人に増加しています。

なお終戦後の昭和二二年の大田区の人口は三二万四千人と激減した後、高度成長初期の昭和三〇年に五六万八千人、昭和四〇年には七五万六千人に膨れ上がっています。

東京への流入住民が重層化した蒲田

蒲田だけにとどまらず東京は常に地方からの出身者によって活力を保ってきました。これは江戸時代からの首都の持つ特性です。「江戸っ子は三世代続かなければ江戸っ子とは言えない」という言葉がありますが、地方の住民は十世代や十五世代続く家などさらに有る訳で、三世代で地元民として認定される東京は、それだけ人の移動の激しい特殊なエリアです。

江戸・東京は常に新しい住民によって膨らみ続けて、日本の戦後、高度成長期もその流入民のエネルギーによって支えられて発展してきました。「江戸っ子」も少し先祖をさかのぼれば、江戸っ子が笑い話の種にする「イナカモン」

だった訳です。

東京やその周辺には仕事があり、戦後の日本の高度成長・発展の基盤です。

その中で蒲田の特性はというと、京浜工業地帯の一角を占め、ホワイトカラーよりも現場労働者が常に必要とされてきた土地柄でした。たとえ田舎者でも、その労働さえ担えれば一人前です。武家の町から変化発展した都心に比べると、東京人であることをさほど意識しなくても構わず、気さくで普段着のままの下町がそのまま発展してきました。先行して流入した者も、自分が上京した時にはそれなりの苦勞をしていて、後から流入してきた者の苦勞が分かるため、面倒もよく見るといった人情味のある下町特有のコミュニティも形成されてきました。戦後も、これらの下町のコミュニティの中から、中小の工場が時代の要請によって形成されてきました。

そのような風土を持つ蒲田の町工場同士の仕事をつなぐネットワークは、強力で、非常に風通しがよく、技術・技能が連携し易かったため、技術・技能の一大集積地として他に例をあまり見ない「いい仕事をする」地域として発展してきました。

優れた技能を身につけることがプライドでありチャンス

以上のような蒲田の風土の中で、グラントキャバレーに通うこととは、優れた技能を身につけ、その技能を誇りに

独立し、高価で優れた製品を作り出せる成功した社長たちのステータスでした。そして、自分の道は自分で切り開くという自由な気風が蒲田にはあります。

青年労働者たちが自分にも成功のチャンスがあることを励みに、いつの日か自分の力でグランドキャバレーに行く日を夢見ました。

グランドキャバレーとは、蒲田のそんな時代の象徴でもあったのです。